

(＊はりポジトリ非登録箇所を示しています)

## 中京大学国際教養学部講演会

日本・ことば・世界  
—ある同時通訳者の思い—  
日本語の特質から日本人・日本社会・政治を説く

開催日時：2016年6月14日（火）16:40～18:00

開催場所：中京大学 名古屋キャンパス 5号館 4階 544教室

講演者：中嶋 寛氏

(同時通訳者、長崎純心大学客員教授〈国際政治〉)

司 会：大内裕和氏 (国際教養学部教授)

### 司会 (大内)：

国際教養学部講演会によろこそいらっしやいました。本日、この国際教養学部講演会の司会を担当します、中京大学国際教養学部の大内裕和です。どうぞよろしくお願いします。では、最初に、国際教養学部の明木学部長からごあいさつの方をお願いいたします。

### 学部長 (明木)：

お忙しい中、たくさんお集まりいただきましてありがとうございます。湾岸戦争の時ですから89年、90年、私は確か中国の留学から帰ったばかりの大学院生だったんですけど、大変なニュースになって、世界はどうなるのかなと思いつつ、夜中までズーッとテレビつけていた。

そうしたらロシアのゴルバチョフさんの声明が出たというので、急にそのニュースが入ってきて、これはもう完全に録画じゃなくて、本当に生の映像だったそうで、同時通訳で若い女の子の声だったんですが、ロシア語の通訳の人が、最初二言、三言、「え、私は」と言った後、もう緊張して聞き取れなくなって、途中でそのかわいい若い女の子の声で、「え、あの、え、ど、どうしよう」という声ばかり聞こえるんです。最後はお話しが終わったら「あ、あ、だそうです」みたいなので終わっちゃったんです。

カフといってマイクのスイッチがある、それを切り忘れていて、その女の子が、アナウンサーの方に映像が戻っても、「ああ、びっくりしたー」という声が聞こえていて、私そっちで楽しんでしまったんです。ただその時私が思ったのは、NHKももっと若い子じゃなくてしっかりした通訳付けろという怒りではなくて、かわいそうよ、こんな条件で通訳させたらって、それぐらい同時通訳っていうのは大変なことで、それをじゃあ訳してって、NHKの方がちょっとひどいなと思ったことがあります。実際にそんなのを頼まれると、本当に通訳とか、翻訳っていうのは大変です。

そういうこともあって、私今日のお話を大変楽しみにしておりますので、皆さん、自分の勉強にも役立つと思いますし、語学だけじゃなくて社会的な面も大変役に立つと思いますので、ぜひ、よく聞いて帰っていただきたいと思います。

**司会：**

それでは、開演したいと思います。本日の講演者は中嶋寛さんです。先ほどお話しありましたように、NHKの衛星放送の海外ニュース部門で1986年の試験放送段階から、この衛星放送にかかわられています。先ほどお話し伺いましたら、放送通訳者の元祖は中嶋さんであると伺いました。元祖放送通訳者ということですね。本日は、講演タイトルは「日本・ことば・世界—ある同時通訳者の思い—」ということをお願いします。それでは、中嶋さん、お願いいたします。

**中嶋：**

ご紹介ありがとうございます。聞こえますでしょうか。ちょっと今、突然いろいろなご紹介があったので、面食らって「私は誰、ここはどこ」っていう感じになってしまっています。とりとめのない話になるかもしれないですけども、いろんなところを駆け足でということになるかもしれませんが、皆さんの何かヒントになるお話ができればと思っています。まずは、この話をする場をくださった中京大学の皆さん、先生方、本当にありがとうございます。それから、多くの方々に集まっていただき、本当にありがとうございます。

それで、私のお話はタイトルは先ほどのご紹介のとおりで、そして副題が「言語に組み込まれた世界観」と大きく出たんですけども、いろんな側面があって、今日はそのほんの一部、自分なりにこれまで思ってきたもののうち、シンタックス編といいますか、構文的なものを中心に話すことになるかと思っています。

先ほどテレビの同時通訳の話をされましたが、私はもう放送通訳の場にはいませんで、ニュースの通訳はここ2年ほどやってなくて、主にこういうブースの中で会議の通訳をやっていますが、これが通訳ブース。これは私が自分で作った紙と木でできた、非常に環境に優しい通訳ブースでして、ちょっと素っ気ないので、周りにいろんなデザイン付けたらどうかと思っていたりするわけです。

今お話のあった放送通訳は1986年からですが、今、主にやっている会議通訳、自分にとってそのきっかけは92年ですね。このころはちょうど、91年が先ほどお話のあった湾岸戦争のころですけども、その前は東西冷戦が終わる、ベルリンの壁が崩壊、あれよあれよという間にソ連や共産圏が崩壊していった激動の時代に放送通訳を始めたのですが、92年というとブラジルのリオデジャネイロで地球サミットというのがあって環境問題に関心が高まりました。日本でもNGOができたりとかして、環境問題などでシンポジウムなんか開かれ始めていた。そういう中で自分も会議通訳をやるようになっていったんですね。

この写真、マイクが2つありますけれども、耳にヘッドホンをはめて、聞こえてくるの

が英語であれば、こちらの日本語のマイクを使い、日本語であればこちらの英語用の、別のマイクでしゃべるんです。隣にいるのは私の同僚で、今は私が通訳している番です。隣の人は何か読んでいますよね。何か自分の資料を見ているんですね。次に話す、自分が通訳を担当する人の書いた論文なんかを見ていたりするわけですね。下準備をやっている。3人目の通訳者も控えていまして、ローテーションで、集中力は15分、20分ぐらいしかもたないので、回していくという会議通訳の作業です。

こちらは放送通訳の場面です。スタジオの中です。ニュースがあると、定時ニュースは、一度ニュースが流れてきたものを、メモを取りながら、そしてそれを録画して、もういっぺん聞き直したりなんかして、準備してスタジオに入るとのことやるわけですが、突発的なニュースの場合、冒頭のご紹介にもありましたが、それはもう生の同時通訳であったり、あるいは大統領が演説をするとか、インタビューに答えるとか、記者会見をやるとなると、同時通訳でということですね。

初めのころは、こうやって人についていって、あいさつを通訳するとか、そんなようなところから始まるんですね。通訳者のキャリア。この写真は逐次通訳というやつで、メモを取って、この人が話したのをしばらくメモ取って、それを通訳して、交互に話す。新しいところではこういう、これは原発事故のあとポーランドに行ったときの写真、ポーランドのシュチェチンですね。核兵器や原発の話。そういう話の時も、隣の人が話す、私はメモを取る、しばらくすると立場が変わって、私が通訳をやり、終わると今度は講師が話し始めるという、それを交互に続けるという方法ですね。

同時通訳の場合は、こうやってブースの中に入って、通訳者だけ別の世界になるんですけども、これはニューヨークの国連の本会議場ですね。これは2年前のウイーンの、核兵器の人道上の影響に関する会議という時の、日本語のブースですね。こんな斜めになって、話している人はこの真下にいて見えないとか、大変な場所になっていますけどね。

今年の始めにはチュニジアの人が来て、去年のノーベル平和賞の人だったんですけども、この時にはフランス語でした。皆さんの話を聞いたらいろんな言語を勉強していらっしゃるといって、一応後でまたそのへんも話しますが、私が皆さんの年代のころは、ネイティブといえるくらいの言葉が3つ、4つありましたね…。カナダ人のやっている学校で、中学から英語とフランス語を習いました。その話はまたあとでしましょう。

これは逐次通訳の現場でして、こうやってメモを取っている。この人はまだしゃべっている。次に立場が変わって私がしゃべる。皆さんは、同時通訳のほうが格段に難しいという頭あるかもしれないですけども、実は逐次通訳の方がかえって難しかったりするんですね。これは一概には言えない。逐次通訳というのは一定の長さのものを覚えておかなきゃいけませんので、そしてメモを取るんですけども、すべてメモれるわけではない。記憶に頼る部分もあるし、大変なんですね。文章の完成度も求められますよね、きちんとした言葉で伝えなくちゃいけない。通訳は逐次通訳に始まって逐次通訳に終わるといふくらいなんです。

通訳用にメモを取るには、習熟に時間がかかるんですけども、この写真は何か主催者

の人が、通訳って面白いなっていうんですね。このメモが面白いと言って写真に撮って、ホームページで紹介してるんです。私の独特のメモの取り方。習熟するのに10年、20年ってかかってるんです。

そして、これは「ウispアリング」というやつ。「ささやく」ということです。これは同時通訳ではなくて逐次通訳をやっているときなんです、この別の人が日本語でしゃべるのを、外国人の講師のために耳元で英語にしてささやいているわけですね。小声で通訳してあげている。これもそうです。ウispアリング。大きな声を出しすぎると、私その人の日本語が聞き取れない。小さすぎるとこんどは外国人講師が困る、私の声が聞きづらくなる、というウispアリングです。

何か今日はいろんなことを話したいので、私が普段「これだけはやってくれるな」と皆さんに言っていることを自分でしてしまうはめになりそうですね。「早口でしゃべるな」「行く先が分からないような止めどないしゃべり方をするな」といつも口酸っぱく言っているんですけど、どうやら今日は自分でそれをやりそうです。

翻訳、通訳、それをやる人のことを何というか、翻訳をやる人は、翻訳者とか、場合によっては偉くなって翻訳家なんて言われるようになるわけですけど、通訳というと通訳やる人も通訳なんですよ。通訳って人間じゃないのかって。

先輩たちは「通訳者」という言葉をつくって、この言葉を広めなさいと、通訳だって人間だ、人間扱いしてもらいなさいということで、通訳者という言葉を広めようとしたんですけども、これちょっと頭の隅っこに置いておいて下さい。今日の話に後でつながってくると思います。

通訳する人を通訳者、何かをする人、主体、動作主っていうのかな、エージェントとったりしますが、それを示すのが英語ではerで、インタープリットというのと、インタープリター。英語では別々なわけですよ。でも、日本語では両方同じ言葉を使っていた。

ブースがあったり、ブースがなかったりして同時通訳をやっています。実際に同時通訳をやっているのを、ちょっとお聞かせしようと思ったんですが、時間がないということで、いきなりですね、皆さんにちょっと同時通訳やらしてもらおうということを考えました。

それで、オバマ大統領と広島映像、これから流しますので、皆さんなりに、この場で日本語にちょっとやってみましょう。割とゆっくりですので。いきますよ。

## 【英語】

やっている人がほとんどいないので、ちょっと止めますね。やってほしかったんですけどね、何とか。これは、何か原稿を読んでいるんですね。でも、ゆっくり目に読んでいますし、ポーズ、間（あいだ）、間（ま）がありますので、やりやすい。そんなに難しい単語も出てこない、と思ったんですけどね。実はもう一つあって、これをやった後に、これもやらしてもらおうかと思ったんですけどね。

【英語】。

ちょっとこれ、音量が低いのでやめましょう。

違いが一つあって、前のは準備された、事前に練りに練った原稿を読み上げていて、後のほうのはその場で思い付いた言葉を、そらでしゃべるといいますか、そういう形なんですよね。ですから、ちょっとしかお聞かせできなかったですけど、途中で言い淀んだり、言葉を探したり、ゆっくり目だし、文章の構造もそんなに複雑じゃないんですね。こうやってそらでしゃべっていて、こっちの方がもっとやりやすかったはずですよ。

今、皆さん、あまりやってくれませんでしたけど、聞きながら同時に話す——そんなのやったことないし、いきなりやれって言われてもという、そんな戸惑いの顔を皆さんしていたようですね。だって聞きながら、その、今聞こえてくる言葉を通訳していると、その先が聞こえなくなりますよね。自分がしゃべったり、考えたりしてれば、注意力も聞くのもおろそかになるし、自分で声を出せば、他の人の声をさえぎって物理的に音が聞こえなくなる。自分の耳に届かなくなる。そういう状態ですよ。そんなこと初めてだして皆さん言われるかもしれませんが、実は似たような作業は、誰しもやっているんですね。

さっきの授業でも、皆さんやっていたんです。先生の話の聞きながらメモを取っていた。メモを取っている間、聞くのを、じゃあ、やめるかという、先生の話の聞き続けながら、先を聞きながらメモも続けているわけですよ。インプットというか、解釈は止めずに、自分のアウトプットも同時にしていて、その作業を続けるという、同時通訳と似たようなことをやっているわけですよ。

ただ違いは、同時通訳をやっている場合は、音声という同じ媒体を、聞くのとしゃべるとで同時に使っている。耳から入れるのと口から出すのとで、通訳しますからね。音声という同じ媒体というか、チャンネルを使っている。なので、しゃべることによって聞くのがちょっと邪魔されるというところがある。そして、2つの言語にまたがっている。そこも違う。でももし皆さんが英語で行われている授業を日本語でノートを取っていたら、もっと同時通訳に似た状況がそこにあるんですね。

そして、先ほどの違い、もう一つ付け加えれば、話し言葉と書き言葉、これもかなり状況は違うんですね。書き言葉っていうのは、特に今回、このオバマ大統領が前の日まで一生懸命自分で文章を練っていたと言われていますが、これだけのスペースの中にいろんなものをつめ込む、情報もつまっていれば、場合によっては複雑な構造になったり、それから、美しい言葉を入れたり、修辞も凝っていたりするわけですね。それをその場で聞いて、別の言語で再現するというのは、よほど難しいわけです。

話し言葉という、さっきのは記者会見でしたよね。沖縄でアメリカ軍の軍属が事件を起こした。それに対して、記者会見で質問に答えているところだったので、その場で言葉を思い付きながらしゃべっている。だから、書き言葉の読み上げではなくて、話し言葉になっているということですね。

同時通訳というのは、この譜面はフーガなんですけども、何か例えるとフーガみたいな

もので、まず主題が流れてきて、これはどういう意味かというのをある程度つかんだところでやおら出ていくという感じですよ。フーガというのは、明治時代の人は遁走曲と訳して、英語でも fugitive と言いますが、当局の手を逃れた、脱走してきたような人、fugitive、逃亡者か。逃げるという意味があるわけですよ。

だから主題が来て、それを追っ掛けていくような、同時通訳なんですけども、イメージとして。もう一つ思っているのは、音楽のほかにこれです。『Fantasia』というのはウォルト・ディズニーの映画で、魔法使いの弟子が魔法の使い方を生半可にしか覚えてなくて、水汲みをするんですが、それをほうきにやらせて、自分は怠けようという魂胆なんです。でもこれを止める方法を忘れてしまったというか、そこまでちゃんと覚えてなくて水浸しになるという話なんです。

これは自分のイメージとしては、オバマさんの声が聞こえてくると、すぐ、どんどん、来たものはどんどん汲んでいけばいいんですけれども、日本語と英語の関係上、すぐにはとりかかれない。音楽の例えを続ければカノンみたいに、来たらどんどん同じ形で繰り返していけばいいんですけれども——金先生はどこかそのへんにおられたですよ——韓国語の場合は日本語とほとんど同じ構造ですから、カノンみたいにして、聞いたらすぐ日本語に移し替えて、割と待たなくていいかもしれないんですけれども、英語ではどうしても待ってしまう。構造が違う言葉なので、しばらく待たないと、意味のある日本語にならないんです。もう少し先まで聞かないと。

しかし下手をすると追いつかなくなって水がこぼれていってしまうという、そんなイメージがあったんですね。そしてもう一つ。今の人は知らないと思いますが、昔インベーダーゲームというのがあって、どんどん宇宙人みたいなのが攻めて来る、それをどんどん撃ち落としていかないとやがて自分がやられてしまうという、そういう感じがするんですね。同時通訳をやっていると。

すぐカノンみたいにおうむ返しをしようと言いましたが——おうむ返しというと、同時通訳を訓練する時に、まず、おうむ返しの訓練からやらされます。これを shadowing と呼んでいますが、テレビなど聞きながら練習するんです。家でひとりで。いきなりやると家族の人が心配するかも知れませんが。ニュース番組でいいです。聞いたフレーズをすぐそのまま口に出して繰り返して行く。日本語を聞いて、その日本語をそのまま繰り返すのでいいんです、取りあえずはね。あるいは、皆さんも英語ができる人ならいきなり英語に通訳してやっててもいいかも知れませんが、最初はうまくいかないと思います。さっき話した魔法使いの弟子みたいに水汲みが追いつかずに、水浸しになる。あるいはインベーダーにやられてゲームオーバーです。

最初は同じものを繰り返させられるんです。似たようなところで shadowing をするというのなら、名古屋弁が得意な人は、日本語で聞いて名古屋弁で返すということをしてもいいかもしれないですけども、それならやりやすいですよ。構文、シンタックスがまったく同じですから。

ちょっと遅れて出る。でも、いきなり飛び付いては、欧米の言葉から特に日本語に訳す

場合は、いろいろと後が続かなくなる。単語のレベルですらそうです。例えばこういう例でもいいんですが、two hundred と聞いて、これでもすぐ日本語に「二百」と訳せないというところがあります。というのも、two hundred と言われた後に thousand と続いているかもしれないからです。それだと「二十万」ですからね。「二百」と飛び付かずに、しばらく待ってなくちゃいけないわけですよ。水桶の中に少し溜めないといけない。そして後に何も続いていないのを確認できたら、「二百」でいい。桶にためるといいましたが、これは短期記憶、short-term memory です。同時通訳は短期記憶をひたすら酷使します。

先ほど聞いたフランス語を勉強している人もいるってことでしたが、フランス語なんかだったらもっと大変ですよ。quatre (=4) と言われたからといって、すぐ「四」と言ったら駄目ですよ。そのあとに vingts (=20s) と続いているかもしれない。quatre vingts なら「八十」です。でも、だからと言って「八十」と言ってしまうのもまだ早い。quatre vingts dix huit (=“4×20+18”) って続けられれたらどうなります？「九十八」ですよ。フランス語の数字の数え方はこんなですから。じゃあ、ここまできたら、やっと訳せるのか「九十八」って。という、それもまだ早すぎる。その後に mille (=1,000) とかありますからね。そうだと「九万八千」。だからどんどん溜めておかななくちゃいけないわけですよ、しばらく。そういう事情があるんですね、それも難しさですね。

こうして通訳の話をしていると、どんどん横道にそれて、最後に時間がなくなるかもしれないですけども、さっきも先生方にお話を伺って、こういう部分が皆さん案外聞きたいところだったりするかもしれないということなのでお話しすると、さる会議の冒頭で、その先生、非常に有名な学者の先生なんですけども、通訳がどう訳しているのかを点検しながらしゃべるんですね。

先生がしばらく言って、私が遅れて訳すんですけども、すぐには訳せない、少し待ってないことには訳せない。すると先生は、「この通訳何やっているんだろう」って止まるわけですよ。5分で済むはずのあいさつが20分ぐらいかかって、最後に「通訳がもたもたして、時間がかかってすみませんでした」って言われました。先生が立ち止まるから行けないですよ。先を行ってくれば、こちらは、少し遅れますが、あとに付いて行きますから。

テレビでやった時も、ブースの中にディレクターとか、機械、スイッチ間違えないように付けてくれている人がいるわけですが、大統領の演説が始まって、しばらく待ってなくちゃいけないですから、やおら始めるわけで、フーガですから、主題がちょっと流れた後で。ところが私がすぐ始めないのでディレクターの人が横でパニックになりかけた。ですから、その人がそれ以上慌てないよう、見切り発車しました。もう忘れましたが「えー、そうですね、ですから、まあ」とか、意味はないのですが、とにかく通訳し始めましたということ伝えるために。その経験から、テレビのときは「通訳は遅れて始めますから心配しないで下さい」と必ず言うようにしています。

冒頭のご紹介のところで、何か湾岸戦争時代に大変なロシア語の人がいたっておっしゃってましたが、ちょっとそれ、私はその人のことは何も言えないですね。同情するしかない。今言ったような想定外のことが起きたり、機械の故障もありますからね。音量が

低かったり。私の経験で一番辛かったのは、配線の関係でしょうか、自分の声が戻って来たときです。原音だけを聞きたいのに自分の声が重なっている。この時は大変でした。自分の声のすき間から原音を聞きながら訳した。その他にもブースの中ではいろんなことが起きます。

日英の、今日はシンタックスを中心に話をすると申しましたので、ほかの部分はここでちょっといくつか駆け足で列挙しておきましょう。

英語・日本語でもそうですが、言語が違うと1対1の対応をしていない、というところできろいろ苦勞させられるということがあります。

それから、世の中、世界のいろいろな現実の分類の仕方が言語によって違うということがあったりとか、あるいは価値判断が含まれていて色が付いている言葉、これも結構落とし穴だったりします。それからイディオム。言葉、単語同士を並べてそのまま訳そうとするんだけど、どうもこれが一つの成句であって、単語一つ一つを訳していても意味をなさないといったことがあります。それから似て非なるもの、一見、姿かたちは似ているんだけど、どうも中身が違う。これは、フランス語を勉強している人は、“faux ami”（偽りの友）という言葉をご存知かもしれませんが、例えば英語で library（図書館）って言うから、フランス語で librairie って言えば「図書館」かと思ったら、フランス語では「出版社」であって、図書館は“bibliothèque” だったりするわけですよ。

今日みたいに lecture をやっているのだから、フランス語でも lecture という言葉があるから、これも「講義」かということ、フランス語では「読書」（英語の reading）という意味だったりするということ、そういう「偽りの友」が外国語にはいっぱい潜んでいて、それでよく間違えるということがあります。いまの例は、どれも初歩的なことですけど。

それから、さっきの記者会見。途中で止めちゃいましたけども、法律用語がいっぱい出てくるとか、通訳をやる上で専門知識、それから背景知識を知っておかなくちゃなかなか難しいということですよ。

「色」ということで少し言うと、昔、小錦という相撲取りさんがいて、日本人から「モンスターだ」と言われて本人は痛く傷ついたんですね。日本人は褒め言葉として怪物＝モンスターと言ったんですけど、英語では形容詞が monstrous 「醜悪な、醜い」。悪い意味なんですよ、モンスターって。そういうのが外国語を勉強していてもなかなか見えない。色が見えないんですね。その言葉が実際に使われている現場、現実、その社会であるとか文化の中に分け入っていかないと。私には色弱という障害があって、色の見えにくいところがあるんですけども、言語が違うと、本来見えているはずの色が見えない世界に入っていくという、そういう怖さがありますが、場合によってはとんでもない間違いになる。最近の例では“a bigot” これは「差別主義者」のことを言うのですが、「偏屈者」なんて報道で訳されていました。

同僚がテレビのニュースを通訳しているのを聞いていたら、犬が出て来て“a friendly dog” というのを「友好的な犬」なんて訳しているんですね。通訳やっている、もう言葉選んでいる暇がなかったりするわけですから、今日の私みたいに物凄く早口な人もいま

すし、変な日本語を口走ってしまうわけです。これは普通の日本語で言えば「人懐っこい犬」なんでしょうが、それ以来、さっきの「偽りの友」ではないですが、「こなれていない訳語」のことを私は「友好的な犬」と呼ぶことにしました。それで道で他所の犬がしっぽ振って寄って来たりすると「おお、友好的な犬だな」とか、冗談で言っているのですが、特に同時通訳では、その場でなかなかの確な言葉が思いつかないこともあって、変な言い方になるんですね。ま、先を急いでいるので、そこんとこ勘弁、と。

“What are you waiting for?” これなんかも「何を待っているの」って訳しちゃうわけですね。ところが、これは、「ええ、はい、今ちょっと、バスが来るのを待っています」って答えるような質問じゃない。そういう「情報を引き出すための質問」じゃないわけですよ。“What are you waiting for?” つまり、「急ぎなさい」と言ってるわけです。日本語ではそういうときは「何をグズグズしているの」と言います。ですからそう訳さなくちゃいけないんですけども、これは翻訳でも、そういうちゃんとした日本語に訳されていなかったりしますね。

1対1の対応になってないっていうのは、様々ですが、例えば英語で“president”と言うんですね。ところが日本語ではこんだけいろいろ選択の幅がある。文脈で違って来たりする。

英語で“putting a square peg in a round hole”「四角い栓を丸い穴にはめる」っていう言い方があるんですけども、四角いものを丸いものに詰め込むような作業ですよ、通訳や翻訳って。どうしてもはみ出る部分があったり、うまく収まらない部分があったり。この画像、動くのかな。この子はすごいですよ、動かないか、残念。この子は、なんとか押し込めようとして、入らなくて、どうしたかっていうと、この箱のふたそのものを外して入れちゃった。ひょっとしたら将来大物になるかもしれません。枠にとらわれていないです。これは後で言う、翻訳できないから、そのままカタカナでという、今、日本語にあふれ返っていますけども、案外ふたを外して入れているのがいわゆるカタカナ英語なんですね。翻訳という作業をもうあきらめてしまっている。

さて、シンタックスの話に入っていきたいんですが、日本語の文法というのを、欧米の言葉の視点から見ていると、日本語というのは厳格でない。結構、もの分かりがいいというのか、いい加減というのか、効率がいいというのか、頭がいいというのか、文脈で分かっていることはどんどん省けちゃう。主語だって省けるし、動詞だって省いたっていいし、目的語だって省く。でもそれは欧米の言語から見てそうなのであって、日本語ではあたりまえのこと。だから、時々文脈が分かってない話を通訳させられるんですけど、その場にいる皆さんはよく分かっている話。通訳だけ文脈が分かってないという状況。これはよくあるんですが、そこで通訳させられると本当に大変です。何のことだか分からない話。それはなかなか英語になりようがなかったりする。逆に英語から日本語に訳す場合は、とても長くなったりする。内容が分かっていないので逐一訳すからです。内容が分かっていたら、効率よく的確に日本語にできるので、簡潔になりますけど。

でも日本語の発言。いろいろ省けますから、何を言っておられるのかよく分からない、

ということがありますね。それから、今日の私の話がそうかもしれませんが、構成上、日本人の話は、どこに向かっているのかがよく分からない、ということがありますね。それでも日本人は聞き上手で、結講話し合いは続きますが。

しかし、誰のことを言っているのか、何のこと言ってるのか、見えない、というのはけっこうあります。そもそも主語が何なのか、とか。あるいは修飾、日本語ってどれがどれにかかっているか、曖昧だったり、幾通りにもとれたりしますよね。私はこれを、「修飾難」って言ってるんですけどね。人によっては「修飾氷河期」みたいな文章を書く。日本語はどこにどうかかるかが厳格でない。はっきりさせない。ですから文章を書くときなど、いろんなことを詰め込んで、複雑な文になりがちですから、よほど注意してかからないといけませんね。皆さんも文章を書く時は、日本語は、相手の身になって自分の文章を客観的に見ながら書かないと、誤解が生じる文章、分かりにくい文章になってしまいます。本人は、何がどこがどのようにかかる、自分がどこへ向かっているということを分かっていますが、聞かされる側は、初めて聞くわけですからね。

そして決定的なのがこれ。語順です。英語なんかは、SVO型言語なんですね。S主語、V動詞があってO目的語がある。日本語はSOV。動詞が最後に来るわけですよ。

これも通訳界の冗談としてあるんですが、冒頭で新米の通訳者の話をされたので思い出しました。会議通訳でですね、日本人の人が来て、「私は、皆さんの有り難いお招きで、きょうは東京からはるばる新幹線で……」とか言い始めるわけですね。すると通訳者は“I”(=私)って訳し始めるんですよ。始めたはいいが、それっきり、ズーッと沈黙してるわけです。そうすると、聴衆のアメリカ人が「おまえ何やってんだ」ってんで、それに「はい、通訳しています」とは答えませんが、さっきのやつですよ。“What are you waiting for?”「早く始めろ」ですよ。するとその通訳者の答えが落ちなんですが、こう来るんです。“I'm waiting for a verb.”「動詞が来るのを待ってるんだ」って。“I”と言ったっきり、日本語は動詞がなかなか来ないもんだから訳せなかった。沈黙した。という冗談です。そういう間もどんどん通訳は先を続けなくちゃいけないんですね。最初にお話しをした先生と違って、この場合、話し手は立ち止まらずに先を続けているわけですから、それを英語にする方法はあるんです。動詞が出て来るのを待たずとも。

じゃあ、どうやってやるのか。さっきの記者会見の時のオバマさん、こう言ってますね。

I want to emphasize that  
the United States is appalled by any violent crime  
that may have occurred or been carried out  
by any U.S. personnel or U.S. contractors.

初心者だったら、あるいは皆さんのひょっとしたら入学試験の時の英文和訳も、このあたりから始めて訳すんですね、「私は」ときて、あるいはこの辺からかな、この辺かな、「凶悪な犯罪が起きたり、あるいは、アメリカの要員、あるいは軍属によって犯されること」にと、後ろからくるわけですよ。

でも、同時通訳をやってて、ここまで待ってたら、先に聞いたこと、忘れてるかもしれ

れない。魔法使いの弟子なら水をこぼしっぱなしです。水をどんどん汲まなくていけない。だからこれを、聞こえた分だけでどんどん文を作っていきます。たまに、ズーッと覚えられる話、原文がこの辺までいって、ここを訳し始めることもあります。簡単な話、ゆっくり目に話しているときはそれでもいいんですが、下手すると結構不正確になったりしますよね。通訳は短期記憶 (short-term memory) を酷使する作業と言いましたが、疲労も激しい。どちらかというとカノンを早く始めたい。主題が変容していくようなフーガよりは。やはり、後で水浸しになるのは怖い、インベーダーにやられるのは怖いので、意味が取れて、一つ文ができるところで、小さな文、文をどんどん作っていくわけですね。

$S = s1 + s2 + s3 \dots$

だから、大きな一つの文だから、一つの文で訳さなくちゃいけないということはないんです。例えばここまで聞いて、一つ文を作っていくわけですね。先ほどの冗談を例にすれば、「東京」と聞いて、「東京から来ました」。「新幹線」と聞いて「新幹線を使いました」。例えばです。そんなふうにして流れて行くんです。短期記憶の負担も軽くなります。

記者会見で言うと、「私が強調したいのはこれです。アメリカが大変驚愕しているということなんです。」などと言うわけですね。それに続けて「暴力的な犯罪が起きる。あるいは引き起こされる。アメリカの軍人によって、あるいは軍属によって。そのことに驚いているということ…」と、こういうふうにして細切れにしてもやっていけるわけですね。必ずそうしろとは言いませんが。そんなことをしながら同時通訳やってくわけですね。いかにも同時通訳調でしょ。何であんな変な言い方をするのかと、それは一つにはこういう事情があるんです。

そこでもう一つは、構文編でいくと、あの後オバマさんはこう言っていた。

I think it's important to point out that

the SOFA -- the Status of Forces Agreement --

does not in any way prevent

the full prosecution and the need for justice under the Japanese legal system.

“SOFA” というのは日米地位協定のことですね。「地位協定は…を妨げない」って、英語、あるいはヨーロッパの言葉ってこういうのが多いわけですね。日本語では、本来ちょっと変なんです。意味は通るし、今の日本人はだいぶこういう構文に慣れてはきたんですけども、無生物主語とって、ちょっと特殊と言えれば特殊。もっと日本語的な言い方をすれば「地位協定があるからとって、…ができないわけではない」です。

「欧文脈」などと言って、翻訳調っぽい。今は慣れてしまっているんですが、昔は、『何が彼女をそうさせたか』っていう映画のタイトルもあったんですよ。そうしたら、ものすごいこれが衝撃的な題名ということで、その時は、大正時代ですか？その題名だけで大入り満員になったっていう話を聞いたことがあります。「何が彼女をそうさせたか」。日本人なら「なぜ彼女はそんなことしたの？」というふうな言い方が普通なんですけど。では、何が日本人にそんな言い方をさせているのか、ということですよ。

無生物主語。後でまた触れたいと思います。それから語順のことと言うと、英語では関

係代名詞っていうのがあったりで、修飾の方向が180度転換する。前の語句にかかる句「関係代名詞」。日本語では、V（動詞）が一番最後なので、そこに向かってひたすら一方通行で進んでいるような感じがしますが。

ところが、欧米の言語っていうのは、時々この who とか which とか、関係代名詞というのが出て来る。関係代名詞になると向きがひっくり返って、今度はこっち側に文章がつながっていく、ぶら下がって行くみたいな、そういうところがある。それもさっき言ったようないろんなテクニクでしのいでいくんですけどね。イギリス人なんか得意です。どんどん which、when とか、あとにどんどん文というか節がくっついていって、なかなか終わらない、長い文章。

そうすると、例えば、こんな構文があったとして、“This does not mean …” いくら何でも、「このことは」って一番最初に訳しておいて、そのあとにとつともなく長い文節があったとして、それを言ったあとに、「意味しない」って訳しても、その日本語を聞いている人にはすごく分かりにくい。何のことだったんだっけ、ですよ。え？ 何が何を意味しないの？って。そういう時、同時通訳をやりながらどんどん片付けていきたい私は、インベダーをどんどん撃ち落として行きたい。“This does not mean” と聞いて「だからといって」というような日本語が浮かぶようになるわけです。こう訳せば、溜めておかなくていいし、話の流れとしても、それまでのことを踏まえてこれからどう論理が展開していくかも見通せる。それを「このことは」と聞かされて、そのあといろいろごちゃごちゃ聞かされるから、話の流れが分からなくなるんですね。

そういう文章の構成というのは、段落にも影響します。日本人の話って前置きがやたら長いです。まさに私の今日の話がそうかもしれない。どこに行こうとしているかよく見えませんか？ そこを私自身反省しなくちゃいけないんですけども。

だから、例えば、質疑応答。会議やっていて、日本人が“I have a question.” とかいつて手を上げて、何かしゃべりだすんですよ。ところがなかなか質問が出てこなくて、アメリカ人なんかいらだって来て、“Did you say you have a question?” なんて割って入ってくる。最初に疑問文を發して、そのあと、こういう質問をするのは、これこれの理由で、というふうな流れになるのが基本的な構造です。だいたい向こうの人の、普通の、必ずしもそうじゃないですけど、一般的な、標準的な構成はね。皆さんも質問するときは、そういう構成を心がけるといいですよ。

ですから、逐次通訳のときなど、その日本人の長たらしい発言の一番後ろにあった疑問文を、いきなり冒頭に持って来て英語にするようなこともあります。場合によっては。きっと日本語の語順が、私たちの段落の構成や思考の経路にまで影響しているんですね。

語順のことでもう一つ言っておくと、例えば英語の冗談。英語のジョークって、一番最後、文章の一番最後で笑うようになっているのが普通です。落ちです。そこでドーンと笑うんですよ。ところがSOVに変換しなくちゃいけないので日本語訳では順序が入れ替わってしまって、ネタバレというか、文章の真ん中ぐらいにパンチラインが来て、そのあとに余計なものが続くので、じゃまして、切れ味が悪いのなんの、全然面白くない。ジョークの

翻訳ってよほど工夫しないとイケない。そのコツは語順なんです。落ちはいちばん最後に、ということ。

訳す上で、一字一句忠実に SVO を SOV に転換していたのでは、しゃべっている物事の順序が入れ替わったりして、時系列が狂ったりするということもありますね。そういうことをいろいろと踏まえた訳文作りになっている本、私の訳した本を後で紹介しますね。

この写真は、ブースの中で隣の同僚が私に何か見せていまして、私の注意を引こうとしている。たぶんこれは、「あの人がこれ読んでいるわよ」みたいなことを言っていたんですね。「え？ これ読み上げているの？ 俺見てないよ、そんなの」って顔なんです私は。書かれたものを読み上げられる、というのは最悪の状態ですよ。

目で見るというのは、英語、日本語という2つのチャンネルというか、媒体というか、聴覚で作業している中に、視覚というもう一つのメディアが加わる。これはうまくこなせないですね。よくいるんですよ、通訳のために書いてきたっていうんですね、これから話す、読み上げるっていうものをカバンやポケットから取り出してポンと渡す人が。でも、もう手遅れなんです、それをもらっても。自由に話してくれた方がよほど有り難い。そういうものは事前に頂いて、十分読み込んできて通訳するのが理想です。頂く場合でも、ぎりぎりで、準備する時間があまりないのが普通ですが。それと、最後まで原稿をもらえなかった、本人だけがその原稿を持っていて、それを読み上げている。早口で。そういうのが一番きついです。それがまた専門用語だの数字だの固有名詞だのの羅列だったりすると最悪です。あるいは詩の引用とか、条約文、法律文書の読み上げとか。

さて、冒頭で言いました、私が皆さんの年代の時には3つの言葉でネイティブ・スピーカーだったかなというのは、実は私は、生まれは熊本で、小学校から宮崎に行きまして、両親は熊本ですので、家では熊本語の世界、学校へ行くと日本語で、外で遊ぶ時には宮崎語、これで3カ国語がネイティブということなんです。trilingual です。中学校から鹿児島に行きまして、薩摩弁というのはちょっと難しいですから、セミネイティブぐらいまでいくかなというところですが、宮崎は南部で島津藩、薩摩弁の影響も強いところでしたので薩摩弁の語感がよく分かります。方言に関してもいろいろ面白い話もあるんですが、それはちょっと時間の関係で割愛します。

でも、方言、同じやっぱ日本語の方言ですから、構文は、全く同じですよ。日本語と英語の間のように、シンタックスで発想まで、あるいは世界観まで変える必要はない。活用が違うとか、語彙（ごい）が違うとか、発音が、イントネーションが違うとか、そういうことです。じゃあ、方言と国語の違いはというと、要するに熊本国とか、独立してメディアとか、教育とか、政治を全部熊本語でやれば言語になるんです。言語と方言の違いはそういう政治的なことでもあるわけですよ。

よく日本人は、言葉が不得意だっといういますけども、そんなことは全然皆さん思う必要はなくて、方言、何か国語も操る、自分のことを言っているようで申し訳ないですけども、そういう人はたくさんいるわけですよ。

ところがヨーロッパに行って、フランス人とドイツ人の親、結婚して、小学校時代はス

ペインだったみたいな人は3カ国語しゃべるぞ、みたいなこと言うんですけども、ヨーロッパ語の3カ国語でしゃべるのを日本人が、愛知弁、名古屋弁と広島弁とかしゃべって標準語をしゃべる、っていうのとあまり変わらんといいと思うんですね。

その方言が、どうも日本語、今どうですか、皆さん、名古屋弁、活用形とか、いろいろ残ってるところもあるかもしれませんが、消えてってませんか。同時通訳の練習でニュース聞きながら、名古屋弁でやってみてください。家の人聞いたら、うちの子おかしくなったのかと思われるかもしれないという、冒頭紹介した shadowing です。ちょっと間を置いて追うんです。

でも方言はもう消えたのか？どうなるのかと。TPPとか押し寄せて来ますしね。TPPは日本国政府の上に多国籍企業が来て、日本がそっくり乗っ取られる形とっていますが、日本語が貿易障壁などと言われるかもしれない。あるいは小学校から英語教えたり、大学の授業は英語でやれみたいな世界になってくると、どうも英語が日本語の上に来そうな雲行きなんですよ。

私が予測しているのは、そんなふうになっちゃうんじゃないかということです。その可能性が十分ある。日本語は、今のイギリスのケルト語みたいに、遠い過去の基層言語か何かで痕跡を残すぐらいの過去のものになってしまうんじゃないかという危惧を私は抱いているわけです。こういうとケルト語の保存運動の人たちに怒られるでしょうが。

グリム童話集のグリムという人はドイツの方言をいろいろ調べて、民話を集めていた人です。どうも方言というのはそれぞれ違うんだけど、ある仮説を思い付くわけです。同じ先祖から分かれてきて、お互い血がつながっているんじゃないかという、比較歴史言語学というのを始めるわけですね、グリム。実は言語学者。

言語系統論というのをちょっとやっておきたいですね。血のつながりという概念があって、共通の祖先から言語というのは分かれてきているんだというんです。日本語は、その枠からもだいぶ外れていて、どこが親戚かもはっきりとしない。人によっては朝鮮半島と関係が証明できましたと言っている先生もいるんですけども、ヨーロッパの言葉ほどははっきりと親戚関係、これはヨーロッパの言葉は音韻の体系まで例外ないルールで先祖の言語まで再構築するということをやっているわけですね。もちろん英語はゲルマン系です。

日本語はウラル・アルタイ語族というのに一応分類されているんですが、ヨーロッパの言葉ほど緊密なつながりは証明されてない。あるいは日本がここに入るかどうかははっきりしてないですけど、このグループにモンゴルなんかがいるわけですよ。トルコ、モンゴル、朝鮮語、共通しているものはみんな相撲をやっているということですか。

何でモンゴルを持ち出すかというと、モンゴル出身の関取たち。彼らはインタビューすると、日本語がすごく自然なんです。私はモンゴル語って一切何も知らないんですけども、勝手な空想をすると、ひょっとしたら、構文的なもの、発想的なもの、かなり共通しているんじゃないか。思い付く単語をそのまま言えば、そのまま日本語になっていくような、極端な言い方をすれば。でなければ、あそこまで、高校時代から来るにせよ、自然な日本語でしゃべれるものかと。

ということで、言語に組み込まれた世界観。結構共通しているものがモンゴル語というのはあるかもしれないなど。モンゴルの人に会ったらぜひ聞いてみたいと思っています。

さて英語の世界観。英語は英語としてこだわっていることがあって、たとえば、ものは数えられるか、数えられないか、これを異常なまでに気にしているわけですよ。それとか、量で測るものとか、集合を成すものとか、抽象、具象、数えられる、数えられない、特定か不特定か、それから道具立てが、some, many, all, few とかここに書きましたけど、more とか、most なんかも入れていいですが、あるいは a と the、そういう道具を使って考えを組み立てて考えていくという、日本語とは根本的にかなり違う世界です。

日本で、今小学校で英語を教えるというのは、よほど考えて教えなきゃいけないと思うんです。同じ道具をばいと日本人に、日本語を母国語とする人に与えて、基礎語彙を与えれば、じゃあ、しゃべれるようになっていくか、というと、日本人はなかなか難しいです。

ところがヨーロッパの言語を母国語としている人たちに英語では a few, several, some, many, most, all, the こんなのだよ、比較級、最大級はこうだよとか、英語の道具の一定のものを与えると、あとは自分で英語の世界に入っていけるんですね。自分で泳いでいける。日本人はズーッと畳の上の水練をやって、なかなか泳ぐとこまでいかないわけですが。それはやっぱり言語に組み込まれた世界観が違うからだということなんですね。世界観。ま、土台といってもいい。言葉の土台が、欧米のことば同士だとほぼ同じ。すでに英語の土台が母国語の中にある。日本語は違う。だから小学校の英語、その土台を教えないと、英語の習得、どだい無理な話かと。

じゃあ、日本語で何かこだわっていることはあるのか、ですが。さっきの数える、数えないとか、ああいう間違いっていうのは、ネイティブはしない。英語を母国語とする人は、そのへんは、IQ、頭の良し悪しにかかわらずだいたい完璧にできるわけですよ。

じゃあ、日本人、教育水準とか、知能の水準にかかわらず、日本語を母国語としてしゃべる人なら誰にでも自動的にできている区別は何か。あるいは、こだわっているものは何か。大げさに言うと日本語の世界観、宇宙観。全世界、全宇宙にある全てのものに対してやっている区別。誰か思い付きませんか。

To be。「ここに猫が何々」と言うときと、「ここに椅子が何々」というときに使う動詞が違うんですよ、日本語では。「いる」というのと、「ある」というのを使い分けている。ここに「椅子がある」、「猫がいる」と言う。英語では同じ“be”なんですけど。ま、英語では、その椅子や猫が、単数か複数かにこだわり、それによって動詞の語尾が形を変えていたりする。しかし日本語は「いる」と「ある」の区別。これは日本語を母国語とする人は、誰もいちいち意識せずにやっているんです。

そのほかにいろいろ、さっき、「何が彼女をそうさせたか」と言いましたけれども、“What made her do so?” 日本語にすると、このことが彼女をしてこうさせた、みたいに、何か漢文のような言い方になるんですが、無生物主語ですよ。こういうのはごく普通の構文として英語では出てくるんだけど、日本語の世界では本来あまりありえない文なんですね。

ということで、日本語は生物、無生物というのを区別する。いつごろからそういうのを区別し始めたのか知らないですけども、案外新しそうでもあるのですが、そうなっています。この違いは英語で animate/inanimate (有生/無生) といいます。ニュースをやっていたとご紹介いただきましたが、ニュースでいうと、こういうのが出てくるわけです。

“An automobile accident killed three people in Nagoya.” 「交通事故が3人を名古屋で殺しました」。日本語で言うとおかしいわけです。こういう言い方しませんよね。「名古屋で事故が起き」、事故が起きるんです。そして「3人が死ぬ」んですよ。

日本語は、物事が起きる世界であって、英語は誰かが何かを誰かに対して起こす世界だと、そういうところに話を持って行きたいわけなんですけど、時間がないのでどんどん先をいきます。事故は人を殺さない。じゃあ、誰が人を殺すの？ 比喩的な言い方ではしますよ、「癌が彼を殺した」とかね、でも、それはちょっと本来の日本語的から離れた、ちょっともう一つ次元の高い、詩的というか、文学的な表現になっているわけですよ。

人を殺すのはやっぱり生き物じゃないかな。天然災害でも殺すか、いや、殺さないな、やっぱり「台風で死者が出る」わけですから、ああいうものも人を殺さないですよ、日本語の世界では。ずいぶん世界観違うじゃないですか。こういう世界観に私たちは土台で縛られているので、なかなか英語が、土台の違う別の言葉が、自由に使えないというのがひとつあるんじゃないかと思うんです。

だから、さっきもコンピューターやっていましたが、「あなたのリクエストをコンピューターが拒絶しました」とか出る。コンピューターが拒絶するのはい、機械の分際で、そう思ったりするんですけども、あれはたぶん英語をそのまま翻訳しているんですね。下手糞な翻訳。「リクエストは拒否されました」でいいものを、誰が何を誰に対してどうした、どうしても言わなくては気がすまない。英語の世界です。

ニュースで言うと、“Scientists have discovered…” なんてのがある。日本語だと言わなくていいような主語がやたら出てくるという場面をいろいろ思い出します。これは、ゴーヤの中から、がん細胞を殺す成分がこのたび発見されましたっていうニュースですが、そういうのは普通科学者が発見するんだから、とりあえず「発見されました」でいいわけです。日本語の世界では。受け身形で言って、動作主は文脈の中に隠れていても。そのあとのもっと詳しい話をする部分でどこのだれが発見したとか、もっと伝えていけばいい。

特別な人、意外な人が発見した時は言うかもしれない。中京大学の学生さんが発見しました。そういう時には主語はちゃんというわけですけども、なんと、通訳やっている人が発見しましたとか、意表を突いた場合。特別な場合でない限り、普通考えたら分かるだろうっていうのは、日本語の世界では表現されない。日本人、頭いいというのか、効率いいというのか、あうんの呼吸というのか。そういう世界で私たちはやりとりしている。

いずれにせよ、英語と日本語は、「物事を起こす世界」対「物事が起きる世界」、「他動詞系」対「自動詞系」、あるいは「動詞形の言語」と「名詞形の言語」と思うんです。誰が誰に何をやるっていうのが英語。

一方、自動詞系であるということのほかに、文脈でお互い分かることはいちいち言わないのが日本。文脈の中に盛り込む。英語が“explicit”（明示的）なら日本語は“implicit”（黙示的）です。これを「すやり霞の世界」と私は思うんですね。日本の絵は、こういう雲みたいのが出てきて、ここはいちいち描かなくても皆さん分かるでしょう、みたいな、手抜きと言えば手抜きなんだけども、いちいち描かない。すやり霞。雲です。雲ばっかりのような絵すらあったり。一方、西洋の絵画っていうのは、全部ベツタリ描いちゃうわけです。これなんか、闇までもベツタリ闇に描いている。

訳というのは、この霞の世界とベツタリの世界を行ったり来たりして、お互いの世界になじむような形に表現を変えていかなくてはいけない。そうするといい訳ができるという、そういうことを通訳やる中でいろいろ思い付いて、そういうものを自分なりに反映させて訳したといひましようか、実際に私が訳したもので、素晴らしい本がありまして、さりげなく宣伝を入れてるんですが、これですね。これは象が絶滅の危機に瀕する中、ノンフィクションの素晴らしい作品で、ちょっと値段が高いのがなんですけども。『象にささやく男』。中嶋寛訳。

これに関連して象のことや翻訳についてお話をする機会がありました。その時の私の講演のタイトルは、『美しくあいまいな日本の私』だったんですけども、この表題自体、あいまいというところがミソなんですよね。『美しい日本の私』は、川端康成。「美しい私」って言っているの、それとも「美しい日本」？先に話した小出しに訳すテクニックでいくと、“I come from Japan. Japan is a beautiful country.” そう言っているのか、美しい日本の私っていうのは。それとも「美しい、日本の私」私は美しいんですよ “I’m from Japan. I’m beautiful.” そう言ってるのか。本人に聞いてみないと分からない。案外どっちとも言えない、微妙な、両方にかかっているようでかかっているのが日本語の表題ですけど、英語には“Japan beautiful and myself” って訳してありますね。Japanだけに掛けてしまっている。これではいかにもあいまいな日本語のタイトルを、あまりにも「修飾関係」決め過ぎてないかというところですね。

象は、今世界に45万頭くらいで、私が今日話している間でもたぶん5頭くらい殺されているんです。1日100頭近く殺されて、年間に3万頭くらいです。生まれてくる数よりも多いですから絶滅まっしぐらの生き物なんですね。素晴らしい生き物で、その素晴らしさがある本の中に書いてあるんですけども、一方でガンガン増え続けているものがあって、これは億の単位ですね。人間です。

世界の人口、増え方がもう半端じゃないです、最近。これはね、経済成長、経済成長とか言っていますが、その路線は破滅に向かっているということだと思います。アフリカっていうのは、かつて援助をする対象だったんですけど、今はアフリカの経済発展すごいんです。今は投資の対象。アフリカにどんどん今投資が向かって、人口爆発。

その結果、開発が進み、生態系が荒らされて、象は生息地を奪われる。それから象牙を売れば儲かるといって象がどんどん殺されています。象の話をしだすと、もっといくらでも話せるんですけどもこのくらいにしておきます。でも、象が絶滅まっしぐらと言います

が、日本語だって危ないよという話にここでは持って行きいたわけですね。

いわゆるカタカナ英語、外来語と言っていますが、これで日本語、大和言葉と漢語がどんどん今駆逐されていっている。私はベランダに朝顔を植えていまして、これを買に行ったんです。これ、何ていいます？ 皆さん、若い人たち、何て呼ぶの？ これ。じょうろ？ じょうろ。私もそう思ったんです。そうしたら、「ウォータリング・ポット」だって言うんですよ。え？ そこまで来たかって。これはさる大型小売店（変な日本語ですが）。その売り場案内。見たら全部カタカナなんですよ。東急ハンズ、皆さん、名古屋にあったら、売り場案内、見て来てください。全部カタカナになっちゃっていますからね。物事の分類が全部いま英語になりつつありますね。フーズ、キッズ、ステーションナリー…。

さきほど、欧米の人たちは、英語の道具立てと基礎語彙を与えたら、あとは自分で泳いで行くという話をしました。基礎語彙というのは比較歴史言語学でいうと、語彙のいちばん根幹部分。基本語彙は自分たちのネイティブのものをなかなか明け渡さない。ところが日本語は、今どんどんその基本語彙を明け渡す段階にまで来ている。基本語彙というのは、自分たちのアイデンティティと非常につながっている部分なんですけれども、そして今、外来語が、二世、三世の時代が来たと言っているんです。

二世、三世、何のことかという、昔は例えば、「スピーカー」というとこれだったんですね。スピーカー。電気製品。音が出て来る。ところが今はね、「今日のスピーカーは、東京からお越しの」って、別な意味でも使い始めている。第二世代の外来語の時代が来ているんですね。私は日本語の語彙をそっくりもう英語のものに取り換えようというところまで来たかと、日本語全部取り換えにかかっているなと思っています。外来語の勢いは。

通訳やっても、専門家の会議などでは、カタカナばかり、ということありますね。カタカナ英語に「てにをは」付ければだいたい用は済むみたいな、ほとんど構文だけの勝負になっていたりします。

さっき皆さんに同時通訳にチャレンジしてもらいました。昔はそういう意味でしか使わなかった。「チャレンジ」って言う時はね。今までやったことのないことにちょっと挑んでみるというような意味で。ところが今じゃ、「今の御意見に、私ちょっとチャレンジしたい」。異論を、反対意見を述べたいという意味で「チャレンジ」を使ったりするんです。もうすごいんですよ。この勢い。このほかにもいっぱい例がありますけど。

名古屋に中部国際空港をつくる頃でしたが、何か地名を片仮名にする、しない、なんて、論争がありましたよね。その時も何かの会議で名古屋に来たことがありましたが、あれは空港の建物の話ですね。そういう公共性のあるものは、地元のアイデンティティを、文化や伝統を反映させなくちゃいけない。建築家が、空港を造る時にはこうしなさいとか、そういうプレゼンやっていたんです。ここの国際会議場で。国際会議場も公共の建物でしょうから、名古屋のアイデンティティを表しているのか、と見てみたら、何かの騎馬像があるんですよ、ローマ、古代ローマみたいな騎馬像。あれが名古屋のアイデンティティとどう関係してるのか、名古屋なら信長か秀吉だろうに、と思いましたが。確かにこういうのは不自然というか不健全というか。

話が横道にそれてしまいましたが、昔は日本語、幕末から明治時代にかけて、翻訳の時代があったんですね、翻訳ブームの時代が。その頃は、それまでの日本語にないものから、いろんな人が新しい言葉をどんどん造っていったんですね。哲学とか、心理学、経済、民主主義。日本語の近代語彙です。しかし、今はそれで間に合わなくなった。翻訳が間に合わない。というか造語をもうあまりしなくなった。能力もない。昔の人は漢語の素養があったり、「権利」なんて言葉、今の人なら思いつかないでしょ。

あるいは、日本語と思っている言葉でも、それはもともと翻訳なんですね。「遠因」とか、「温床」って、これは英語をそのまま日本語に移し替えた。蜜月 (honey moon) とかですね、摩天楼 (sky scraper) とか、そのまま翻訳している言葉がいっぱいあるんですね、借用翻訳 (loan translation) と言います。この言葉自体が借用翻訳。ローンと言いながら、返済はしないんですけど、調べると、え？これもか、っていうくらいあります。でも今はカタカナ英語が日本語の語彙をそっくり取りに来た。

オバマさんの話に戻ると、ここはもういっぺん今日の話の中心と思ったシンタックスに行きたいんですけども、国家間の問題で、例えば田中角栄という総理大臣が日中共同宣言という、これはずいぶん昔の話で1972年、周恩来首相で、これが毛沢東国家主席で、人民大会堂で戦争のことを言ったわけですね。「中国国民に多大な迷惑をお掛けしました」。

一応「相手」は誰かということは言っていますし、霞の中、と言いますか、文脈の中に主語「日本が」というのはあるわけですけども、はっきり言わないわけです。日本の伝統としては、こういうものは逆にあまりはっきり言わない方が礼節にかなっているという、そういう文化があるんですね。でも、それはなかなかほかの国ではそうでない。国際的に通用しない、というやつです。

その時に人民大会堂の中で、ごうごうと何かざわめきが始まって、日本は戦争で散々ひどいことをやったのに、日本の総理大臣にここであんなことを言わせておいていいのか、「迷惑」ぐらいで済まされていいのかということになって、話がまとまらなかったという、そういう危うい場面もあったんですね。それでもなんとか話はまとまった。

でも、こういう国家の外交的なものははっきり、「誰が誰に何をした」というのをはっきり言うんですね。日中共同声明 (1972) 「日本側は、過去において日本国が戦争を通して中国国民に重大な損害を与えたことについて責任を痛感し、深く反省する」

当時の中国の周恩来首相なんて、日本人も中国人と同じように「共に軍国主義の被害者だった」なんて言って、そういう温厚な姿勢で、今の中国からすると考えられないような時代でもあったんですね。

ところが天皇あたりだと、「不幸な出来事」と言って、やっぱり名詞系の、止まった世界。動詞系の表現でなく、動作主もなく、動作の及んだ相手も表現されない日本語的な世界です。英語は動的で、日本語は静的だとすると、日本語では、不幸な出来事、不幸な戦争とか、不幸な時期があったとか、悲劇とか、そういう言い方をして、誰が誰に何をしたというのは言わないで済むわけです。名詞系の表現で済ませる。昭和天皇がアメリカに行った時も「不幸な戦争」と言っている。自分たちが始めておいて、不幸なはないだろうみたいな、

そういうことを言うアメリカの人たちもいました。

ところが、明仁天皇になると、ここはエリザベス女王に、「人々の受けた傷」と言って、具体的に誰ということをはっきり言わないんですけれども、こちらは、「わが国が中国国民に対して多大の苦難を与えた」と、ここは割とはっきり、誰が誰に何をしたという英語みたいな表現になってきている。

ちょっと韓国の話までいくといよいよ時間がなくなってきましたが、ここも日本は韓国に対しては「不幸な過去があった」とか、名詞形の表現しているんですね。主語がなければ、動詞、他動詞でもなければ、動詞の目的語もない。

村山談話っていうのは、これはもう“explicit”（明示的）ということですよ、明示的に、明確に言っているわけです。「わが国」が「多くの国々に、とりわけアジア諸国の人々に」「多大の損害と苦痛を与え」た。迷惑掛けましたぐらいじゃ済まないっていうのが、だいぶん分かってきた感じですね、日本人もこのあたりでは。韓国に対しても、「わが国によってもたらされた」と、天皇が同じ「不幸」と名詞系で行く中でも、ちょっと主語、動作主が見え始めたりしているわけですね。

こういうことをもっと学ぶべきだと、英語圏の学者なんかから、日本はきちんと謝罪の作法を学ぶべき、謝罪の言語を学ぶべきだと言われてもいました。このオーストラリアの首相、ラッド首相は、リベラル派の人で、先住民にきちんと詫びている、こういうのから学びなさい、と。

で、アイルランドという国は、イギリスとの関係が、ちょうど日本と韓国の関係に似たようなところもあって、イギリスがかつて植民地にして散々苦しい目に遭わせているわけですが、100年ぶりですよ、エリザベス女王が、隣の国なのに、訪問したのは。何て言うのかなと、ちゃんと何か言うんだろなと私も注目してました。

そしたらこれです。何かだまされた気がしましたね。「私たちのつらい過去」って、「主語」が私たちになっていて、イギリスがアイルランドに何をしたという話は一切ないわけですね。「悲劇」と言う。英語使ってるのに、女王様なのに、何か前言われていたのと話が違うな、と。

ということで、オバマさんなんですけども、あれ、時間がちょっと分かんなくなってきましたね、あとどのくらいあるんですたっけ？ もうほとんど時間ない？

**司会：**

いや、まだです、全然。あと、まだ30分あります。

**中嶋：**

あと30分？ ありがとうございます。

これからアメリカの悪口をいろいろ言うかもしれないですけども、このオバマ演説っていうのは、日本人は、何か世論調査、新聞見たら、98%が賛成だったとか、素晴らしかった、評価するってあって、私は「えー？」と思ったんですね。

ただ、アメリカのいいところは、情報を国民に開示するところで、原爆を落とす、使うかどうか、どこに落とすか、落としたりどうなるっていう議論を散々その時に、トルーマン大統領がやっているんですけども、その議論が、機密解除、情報公開で今われわれも見ることができるようになってきているんですね。

それを見ると、明らかに状況証拠として、実験をやろうとしていたというのが読み取れるんですね。周りの地形がこういう山に囲まれているような所がいいとか、それまであまり空襲を受けてない町を選べとか、軍事的な側面のある土地、正当化するための付け足しだろうと思うんですけども、私の解釈では。そのようなことを議論していたアメリカ政府を代表してやってきた大統領が、この日その広島で何を言うかと、注目したわけです。

これ、初めての核実験をしたのは、1945年の7月16日、これはアメリカ本土で、砂漠で核爆発の実験をしたんですが、する前はそれで科学者もどういう結果になるか正確には知らない。scientistsがです。一部には、地球上の酸素が燃え尽きて大変なことになるのではないかと本気で心配していた学者もいたっていうんですね。ところが成功して、それを太平洋のテニアン島という所に運んで、到着したのが28日、そこで組み立てるわけです。えらく急いでいるわけですよ。戦争が終わらないうちに早く使っちゃえ、みたいな、私はそういうふう解釈してしまうんですね。

でも、オバマさんの最初の言葉、出だしの“Seventy-one years ago, on a bright cloudless morning”の部分。日本語訳が、「ある晴れた日」なんかになっているわけですが、私に言わせれば、「ある晴れた日」なんかじゃなくて、原爆を使える態勢になって最初の晴れた日なんです。最初の使える日にすっ飛んでいって落とされたのが広島だったんです。

アメリカは、今でも公式な見解では、多くの命を救った、原爆によって戦争が早く終わった、です。しかし、それに反対する、日本なんかの多く人の意見では、そんなことはない、あの時期は、もう戦争が終わるのは分かっていた。要するに何がなんでも原爆を落とさなかった、使いたかった。

そのほかにも、一般市民、非戦闘員を殺す無差別攻撃は、これは国際法違反なわけですよ。これが責任を問われていない。それから、核軍縮を進めなくちゃいけない義務が核兵器保有国には、アメリカはあるんですけども、それにちゃんと向き合っていない。核兵器禁止条約を作ろうっていう、今勢いづいている運動があるんですけども、それにもそっぽを向いているのがアメリカなんですね。

だから、オバマさんはプラハで、それまでのアメリカの大統領なら決して口にしないような言葉、「核兵器を使った唯一の国の道義的責任」なんて、アメリカ大統領の口から出た言葉とはとても思えないようなことを言った人ですから、広島でどんなことを言うのかなと注目したんです。ま、あまり期待しちゃいけないっていうのは、向こうからのシグナルがあったんですけどね、大きな演説はしないと。で、いきなり出だしはどうですか。さっきの「晴れた日の朝」に続いて、最初の文はこうです。“death fell from the sky and the world was changed.”です。今日私が話して来た英語のシンタックスの話、「誰が何を誰に対してやった」っていうのがないんですよ。「死が空から降ってきた」って、あれ、どっ

ちかっていうと、こういう言い方って日本人が得意な、動作主が出てこない、物事が起きたっていう表現ですよ。それをオバマさんがやったんですよ。これにはびっくりしました。

「誰が」も言わない演説。聞いているとその先もアメリカっていう言葉が出てこないんです。プラハ演説は、広島演説よりももちろん長いんですけども、それでも倍の長さではない。数えてみたら、プラハ演説には10回「アメリカ」という言葉がありました。広島の前にベトナムのハノイでやった演説では、たぶん21回出ている。ですから、広島では徹底してアメリカというのを避けている。

“Americans”というのは2回出てくるんですけど、それは原爆の被害を受けた人への言及です。それから、「アメリカ」って言わない代わりに“a nation”とか、“within our own borders”という言い方をします。“in America”とか、“in the United States”という言い方もしない。1カ所だけ“the United States”が出てくるんですけども、それは日本と同盟を結んでいう、まあ、いいところでアメリカっていうのは姿を現す。

非常に練りに練った、何か非アメリカ人的な、非英語的な演説だったんじゃないかなというのが私の見方です。これ、ごくごく少数意見です。98%が素晴らしい、感動したと言っている演説ですから。ほかの所でやっている演説では、何度も“United States”とか、“America”っていうのが出てきています。広島では徹底的にアメリカ隠しの演説になっているんです。

ほかにも、隠しているということと言うと、日本語的な名詞系というか、そういう表現になっている。“We”も出て来ます。これは「我々アメリカ人」と言っているようでもあり、日本人やあるいは世界の人々も含んでの“We」「私たち」のようでもあり、何か他人事のような演説になっていて、平和がいかに大切かとか、命の尊さとか、何か説教みたいなんです。なんで日本人に爆弾を落としたアメリカという国の大統領に、広島であんな話を聞かされなくちゃいけないのか、と思いました。

まだ皆さん、私の話を極端だなと思っているかもしれないですね。オバマさんの肩を持ちたい、と。

このへんは、ちょっと時間ないので飛ばしますけれども、これはプラハに行った時の演説で、最後の“Yes, we can.”が、やはり言葉になりましたよね。すごく力強い Yes, we can だったですね。can ね。英語の道具といいましたが、「もちろんできますよ」「やりましょう！」、みたいにここでは力強い。

この時はここにあるように前置きもあって “It will take patience and persistence. But now we, too, must ignore the voices who tell us that the world cannot change. We have to insist…” 誰から何と言われても、これは譲ってはならないよ、この時は前置きまでして、締め言葉：“Yes, we can!” 力強かったですよ。「できるのだ！」と。「我々にはその力がある！」ほとんど「やろうじゃないか！」ですよ。ところが、広島でも can が出てくるんですけども、一番最後のここ。「広島、長崎が初めて原爆を落とされた場所としてではなくて、私たちの道徳的な目覚めの場所として記憶されるような未来、そういう未来こそ私たちが選ぶことのできる未来である」。can がまた出てくるんですけども、何かずいぶん

弱いんですね。そのあとも、何かくどくどし続いている。ジョークの所でも触れた切れ味がないったらありゃしない。

ここは、プラハの時と比べて、「選ぶことのできる」というのが、何か、「選ぶ可能性もある」という感じすらします。選ぶかどうか、それは今後の成り行き、というか、「選ぶこともできる」みたいで。ですから、プラハの時からすると、オバマさんはずいぶん弱くなったなという気がしています。

しかも、プラハ演説というのは、大統領に就任したのが1月ですから、もうその数カ月後、その年内のうちにノーベル賞をもらって、これは世界が変わるかなと思いましたよね。イラク戦争、アフガニスタン戦争からも撤退すると言うし。ところが、一方で、そのオバマさん、何をやり始めたかというとなんか無人機の攻撃です。自分たちは出掛けずに、アメリカにいて、身を危険にさらさずに。そして無人機を外国に飛ばして、市民なんかを巻き添えにして殺している。前のブッシュ政権よりもグーッと増えた。急増したんです、無人機による攻撃が。オバマさんは無人機が大好きなんです。

それとか、クラスター爆弾というのは、非人道的な兵器で、大きな爆弾から小爆弾が広い範囲にばらまかれて、戦争が終わった後も地雷のように残って、子どもなんか、一般市民がけがをしたり、死んだりする非人道的な兵器。これに対しては市民が運動を始めて、クラスター爆弾禁止条約というのができた。ところがアメリカはそれに加入しない。しかもサウジアラビアに売却したりして死の商人をやっていますね。

このほかオバマさんが広島で言わなかったことにいくつか触れていきますと、すごいのが核戦力近代化計画です。オバマさんが進めようとしているんです。今後30年で1兆ドルといいますから、110兆円ぐらいですか、過去最大規模の、どんどん核兵器を先鋭化しようという計画を進めている。広島であんな演説を打った陰で彼はそういうことをやっている。核兵器の削減も、今になって気付いてみれば、政権としては過去最低だそうです。700発、約10%。ブッシュ政権では5,300発、約50%。すでにぐんと減ってきているから削減が伸びないという面もあるかもしれないですけども、ロシアとの交渉は止まったままです。

そして、さっき、最初の核実験を7月にやって2週間ちょっとで広島に落としているって言いましたけども、その翌年、さっそくまた核実験を始めた。太平洋のマーシャル諸島。皆さんはビキニ島っていうのを知っているかもしれませんが、この時は水爆の実験を始めたんですね。これ一発で、一番強いもので広島原爆の1,000倍の威力がある。これをアメリカは、12年、13年間の間に67回しました。

これは、広島に落とされたものに換算すると12年の間に毎日毎日、広島原爆の1.5倍分の原爆を落とすことになったことに匹敵する。今なお、このマーシャル諸島は核被害が残っています。そしてこの時には日本人も被曝しているんですね、第五福竜丸というのは皆さんご存じかもしれませんが、実は、最近になってようやく知られるようになったのが、このほかにも1,000隻ぐらいの日本の漁船が被曝していたということです。その記録を日本政府は持っていないながら、国会で厚生大臣が「そういう記録は残っておりません」とうそ

をついていた。しかしアメリカにその記録が行っていて、アメリカは機密開示をしますからそっちで出てきた。「何だ、あったじゃないか、記録が」。

第五福竜丸の件は、アメリカは因果関係を認めずに、補償じゃなくて見舞金として7億円ぐらいのお金を払って、日本政府は共犯関係です、そこで手打ちというか、一件落着にしたんです。

ところが、マーシャル諸島というのは独立した国なんですけども、マーシャル諸島の人たちは今なお苦しんでいる。健康被害。住民を戻しちゃいけないのに戻した島とか、今なお戻れない島があったりします。第五福竜丸以外の被曝をした日本の漁民、漁船の乗組員はどうやって見つけたかという、高知県の高校の先生が、年老いた、昔船に乗っていた人たちの歯をもらってきて、その歯を広島の大学の先生が砕いて、測って、放射能を見つけて被曝を証明したんですね。

アメリカは、ここに何十という島があるんですけども、30島くらいですか。でもそのうちの4島までしか被害を認めていない。除染を始めたのは1990年です。缶詰しか食べられない島、地元でとれたものは今なお食べられないという島があったりするんですね。

そこでマーシャル諸島が国際司法裁判所 (ICJ) に裁判を起こした。オバマさんが広島で言わなかった事、その4です。米ロ英仏中という核兵器保有国5カ国は、核不拡散条約というのに入っていて、この核不拡散条約 (NPT) でこの5カ国のみが核兵器を持っていい、そのほかの国は持ちちゃいけないということになっています。条約に加盟せずに核兵器を持っているインド、パキスタン、北朝鮮、イスラエルといった国もありますが。条約ではまた、保有国には「核軍縮を行う義務がある」ということを決めているんですが、一向に核軍縮が進まないじゃないかということで訴えたんですね。マーシャル諸島。核軍縮義務違反で核兵器保有国を訴えたんです。

これはこの裁判を起こしたマーシャル諸島の外務大臣で、デブルムという人、この人が福島原発の事故に関して、マーシャル諸島と同じことが起きるよ、ということを言っていますが、ウイーンでの素晴らしい演説。私のブログにこの人の演説なんかを訳していますので、今日は詳しくお話ができない分、そういうところで見ただけだと思います。

じゃあ、この裁判にアメリカが出てくるかという、そっぽ向いて出てこないんです。オバマ大統領のアメリカは出てこない。ですから、オバマ大統領の演説を勉強するのもいいんですけど、皆さんに今注目してほしいのは、この裁判です。今はこれから本当にこの裁判ができるかどうかというところを審理している段階で、「核ゼロ裁判」と言われていますが、これは日本もこれを支援するぐらいの関わりがあると思う。当事者だと思うんですね。日本人もここで、太平洋で被曝していますので、唯一の被爆国なんて言わずに——ほかにも被曝している人たちがいっぱいいるわけですよ——この成り行きを皆さんも注目してほしいなと思います。

あと注目してほしいのは、今勢いづいている運動です。核兵器禁止条約をつくりましょうという運動が始まって、これはもう国連でも今130カ国余りが賛同して、作業部会というのができてきたんですね。このきっかけになったのは、人道上の影響というものを問う

会議。これは核兵器に反対するお医者さんなんかが始めた運動なんですけども、これが今や大多数の国が賛成して、その作業部会のアメリカの席が、これなんです。空席。オバマさんのアメリカ。核兵器禁止条約を作りましょうという話し合いに出てこないんです。

日本は唯一の被爆国といいながら、そのアメリカの核の傘で守られているという国。核兵器があるから平和を保っている、という核抑止論というのを政府としては信じている国なので、こういう会議の場で主導的な立場をとれません。要するにこういう禁止条約をつくりましょうというのは、生物兵器も禁止されていて、化学兵器も禁止されている、しかし、もっとそれがひどい兵器である核兵器がなぜ禁止されていない、おかしいじゃないか、そういう素朴な発想ですよ。

それから核兵器は、これが爆発したら、もうとても人間の手には負えない、対応できない。その解決策は、核兵器をなくすしかないというところなんです。ところが日本の政府の代表がこういうところに来て、これはウイーンの会議の時なんですけども、私も通訳しながら椅子からずっこけそうになったし、会場にあるヘラクレスの像もこんなふうになんぞずっこけているんですけども、日本の軍縮大使という人たちは、そういう人道上的影響、これはもう核をなくすしかないという議論を続けてきた会議の3回目、その3回目の会議のいよいよ終わりになって手を挙げるんです。

「議長」って言って、“You are too pessimistic.”「皆さん悲観的過ぎます」って言い始めるんです。え、今さら何だ？核兵器のことに楽観的になれる？核戦争起きても緊急対応できるって言うの？と思いましたけど、「あなたたちは悲観的過ぎる」。「今は日本、東アジアの厳しい国際的な情勢の中で守るにはという事情がありますので、そこも考えてください」なんてことをこの会議の場で言うんです。

じゃあ、その日本政府が言っていることは何かというと、核兵器で国を守るとのこと、そして究極的核廃絶論“the ultimate elimination of nuclear weapons”いつの日かなくしましょう、でも具体的にいつかは言わないんです。そして日本は「現実的にstep by step（段階的に）」核廃絶しましょうという決議を毎年国連で提案して、採択してきているんですけども、それってこのだまし絵じゃないかと。これは運動やっている人たちのホームページから黙ってもらって来たんですけど、どんどん下がって、減っていくようなふうに見えるんですけども、グルグル回って一向に減らない。何かこういうだまし絵なんじゃないかと思えるんです。やるようなことを言って、一向に何もしない。何もせずに、何かが起きるのを待ってるみたい。

オバマさんのあの演説に戻ると、「不断の努力」とか、「追求」とか、何か究極的廃絶論を思わせるようなことを言っているんです。オバマさん、そう言えばプラハでも言っていたんです。「核廃絶は難しいだろう」。“perhaps not in my lifetime”「私が生きている間は、恐らく無理」。そう言っていたんです。よく聞き直してみると。そしてなんと、広島でも同じフレーズが繰り返されたじゃないですか。“perhaps not in my lifetime”。

核軍縮、核廃絶に日米、力を合わせて、背中を向けているんじゃないか？振り返るとこれには長い歴史があるんです、核廃絶と言い始めて、実は。1945年、国連の決議第1号、

世界大戦終わってすぐですからそういう気持ちは強かったんでしょうね。核兵器やめましようと言ったのが、国連の総会決議第1号だったんですよ。それから何年経っている。71年ですよ。

そして、1970年発効のNPT、核不拡散条約で核軍縮を行なう義務があると定めている。ところが、いつまでたっても核軍縮は達成されない。そうか、交渉をちゃんと最後までやるというところまで言わなくちゃいけないのかなと、ようやく気付く、遅すぎるんですけども。それが1996年です。さっきの国際司法裁判所で判断が下された時ですね。軍縮交渉、始めるだけじゃなくて、「完結する義務」もあるんだぞということ言い始めたわけです。そして2000年になって、それは「ちゃんとした約束」だったよなっていうのを再確認して、5年ごとに少しずつ何か加わったり、加わらなかつたりしている。NPT再検討会議。一体いつまでかかる?!っていう話なんです。

オバマさんもそう言えば“not in my lifetime”と繰り返し言っている。そして“will”(必ずそうなる、そうする)とは絶対言わない(日本ではwillを「だろう」とか言って教えるんですが、willは「(必ず、きっと)そうする、そうなる」)。何かあのcanは、やっぱり結構弱いcanだったんじゃないかなと、今にして思えば。要するにオバマの「核なき世界」も結局は究極的核廃絶論に落ち着いてきたのではないのか? プラハ演説でも核なき世界を「追い求める決意」であることを明言するであって、廃絶するとは言っていない。

これだけで驚いちゃいけなくて、ケリー国務長官、日本では外務大臣に当たる人です。広島に来て花輪ささげた時に、非常に好意的に日本のメディアで捉えられて報じられていましたけど、アメリカで何を言っているかという、「運がよければ核廃絶なんて数世紀先の話」だよってアメリカでは言っている人なんですよ。次期大統領になるかもしれないヒラリー・クリントンに至っては、「いつの世紀にか核廃絶」って言っているんです。だから、オバマさんは広島であんなこと言っているけども、次の大統領かも知れない人は、こんなこと言っていますよという、そういうことなんですよ。

だから、確かにオバマさん、大統領選挙に当選してすぐの演説も通訳したんですが、これ、翌年の就任式の時もテレビで通訳やっていました。みんな泣いていますよね、広場を埋め尽くして。日本で総理大臣が選ばれたからっていつて広場を埋め尽くして泣きますか。この時はそんな、素晴らしい、アメリカがにっちもさっちもいなくなった時に現れた天使のような人だったんですけども、今はひょっとしたら悪魔じゃないかっていう、ま、そこまでは言わないですけども。“Yes, we can”。

そんなようなところですよ。日本は起きる世界で、主語のない世界で、ところがオバマさんが似たようなことになってしまった。これから私たちはどこへ行くのか?なんですよ。

日本は、政治的に無関心、投票率も低い。はっきり言って、ほかの国と比べると、例えば今、日本の投票率なんていうのは、何だろう、40%台ぐらいまで下がってきているんですよ。高いところだと、スウェーデンなんかだと85%だったりする。その違いは何か、それを言語の世界観に帰するのは、あまりにも短絡的な考え方だと思うんですけども、日本人は政治的にも何か起きるのを待っているだけなんじゃないかっていうところがある

んじゃないかなと。自分たちが起こすっていうね、そういう意識が必要なんじゃないか。

こういう人なんかは自分で起こそうとしている人ですよ。この人は、何か中国に行って、何て言うんですかね、これはね、私に賛成する人がいたらハグしてくださいっていうんですけども、カタカナ英語の氾濫と批判的なこと言いながら自分でも「ハグ」なんてカタカナ英語を使ってしまいました。

これはみんなね、中国の人はこの日本の若者を見て、「何こいつ、ばかなんじゃないの？」という感じで素通りしていくんですよ。この続きは皆さんで見て下さい。桑原さんという人でね、桑原功一さんか、この続きが結構面白いんです。一部ではSEALDsとかとって、新しく覚醒した人たち、若者が出てきているんですけども、例えばイラク戦争になった時に、ヨーロッパ、欧米の首都、あるいは大都市、何十万人というデモが起きるんですね。日本はせいぜい多くて数千人です。これは去年の夏の国会前の写真で、私はこのへんをフラフラしているんですけども。それよりもまだ、例えばパレスチナ、イスラエル、戦争止めろっていう時に、日本じゃ起きないですよ、こういうデモね。

### 「追記」

(最後に時間がなくなり講演はここで終わりましたが、次のようなことを最後に言って終えるつもりでした。)

このあと最後に東アジアの「領土問題」と have という動詞の話をしたんですけど、この若者の紹介に留めます。考えを行動に移した若者です。

言葉の話から初めて、オバマ大統領とか核兵器の話などについて話をしたのは、外国語を勉強している皆さんに、という意味もあるんです。外国語の勉強ばかりしているとバカになると言う人がいます。英語帝国主義という言葉もあります。英語を外国語として勉強させられる国々は、欧米に結局は従属してしまうとか。詳しい話はできないのですが。そして、それは国としても人としても健全なことではない。

バカという語弊がありますが、英語の勉強ばかりしていると、世界で何が起きているとか、政治のこととか関心が削がれる面もある。語学の勉強、量の上の水練はもういいでしょう。自分の関心のある他のことを勉強しましょう。そして、その道具として、英語を使いましょう。使っているうち、幅広い知識も身につけば、関心の分野も広がる。そして、気がついたら、英語、外国語も、血となり肉となっていた。そうありたいのです。

最後にもう一つ付け加えると：日本語がこの先いよいよ英語をごっそり日本語の語彙にしまうのではないかと言いました。TPP もやってくるかもしれない。これは、ある意味、アメリカの西進、明白なる運命 “manifest destiny” の延長なんですよ。その過程でこれまでアメリカという国は先住民やハワイの人々に何をしたか。彼らの言語や文化がどうなったか。それを考えれば、日本や日本語にこれから先どういう将来が待ち受けているか、分かっていうものです。

一方、中国です。最後、中国の話に持って行きたかったのも、アメリカと中国の地政学的なせめぎ合いのなかで、日本や日本語の将来も決まって来ると思うからです。英語の語

彙をそっくり日本語が取り入れるという事態。英語の辞書に収録されている単語はカタカナに変換すればそのまま日本語という世界です。そして大和言葉や漢語は廃れます。それがシンタックスにまで及べば日本語の英語ピジン化、クレオール化も考えられる。そういう話もしたかったのです。気がつけば日本人、「英語」のネイティブ・スピーカー。我々の今知る日本語は絶滅。日本人は過去との繋がりを断たれる、とそこまで論じる時間はありませんでした。

英語の語彙をそっくり日本語にというのと、そんなバカなと言われるかもしれませんが、日本語は、ある意味、漢字という体系をそっくり取り入れているのです。中国語の意味の素「義素」はそっくり揃っている感じです。ですから、これは日本語が中国文明を離れて、ヨーロッパ文明、なかんづくアングロサクソンに取り込まれる流れ、ともとらえることができると思っています。TPPは、その流れの新しい段階への入り口だと思います。

**司会：**

はい、どうもありがとうございました。まず、言葉の問題から社会情勢、国際情勢の問題まで幅広くお話しいただきましたけども、今の講演の中で、質問なり、ご意見のある方いらっしゃいましたら挙手をお願いします。

**A氏：**

＊

**中嶋：**

それは結構こじ付けに終わっているということが言われていまして、こういう問題ははっきりと確定的にこうだよといえる主張ではないんですね。皆さんに投げかけて、ヒントとして皆さんがこういう問題を考えて、皆さんの意見が今聞けたら一番よかったですけど。あるいは言語学の先生とか、いろいろな言葉をやっていらっしゃる先生から、こういう通訳やっている現場の人間にこんな思い付きがあるんだけれども、それに対しては何かきちんとした反論なり、学問ではこういうことが言われている、そういうことを逆に私のほうが教えていただければ、ということで今日私は参りました。

多分こういう問題で、こういう言語だからこうだ、ということは、確定的にはなかなか言えない、こじつけの部分が多いんですね。その点は申し訳なく思います。いろいろ話しておいて。ただし、日本人が何か自分から事を起こす、というか、起こしにくいっていうのは、やっぱり、別に言語が先なのか、そういう日本人がいるからそういう言語になるのか、ニワトリと卵みたいですけども、何か関係あるような気はしなくもないんです。日本人は何か物事が起きるのを待っていて、物事を起こすという人たちじゃないんじゃない

かなという気がしているんです。

デモなんかあまり起きないし。しかし、投票率というのは教育と関係があるんじゃないかと専門家の先生方は言われていますね。ほかの国では政治というものに対する教育がきちんに行われていて、有権者としてはちゃんと投票しなくちゃいけないんだよという教育がきちんとなされているから意識が高いんだという話は聞きます。しかし、それを言語の構造に結び付けた話は誰もしてないと思います。

言語がこうだから、こうだっていうのは、なかなか言語学の先生なんかは特に否定的ですよね。例えば日本人の先生で、日本語には擬音語がたくさんあって、虫の音を日本人は別の脳で聞いているんだとか、日本人は特殊な脳をしているとか、そういうことを言う人もおられるんだけど、言語学の先生はすごく否定的なんですね。虹の色も、言語に色についての単語がどれだけあるかないかとは関係なく人は認識している、とか。

話す言葉が日本語だから、生き物とそうでないものの区別にこだわる言葉だから、日本人は環境保護に熱心か？命を大切にするか？という、福島事故を受けてドイツとかイタリアはさっそく脱原発を決めましたが、日本は気がつけば原発再稼働。原発の輸出までしようとしている。原発の被曝の規制ものすごく緩めている。食品添加物なんか世界でいちばん多いですよ。象の激減にも寄与しましたよ。

**司会：**

どうもありがとうございます。ほかに何かございますか。

**B氏：**

＊

**中嶋：**

ありますね。会議の場、自分の考えと違う意見を聞かされて、それはかなりつらいということは私もありまして、ですから、やる中で、私は自分のグループを立ち上げ、国境なき通訳団と称するものですが、なかなか同志の数も限られていて、実体は通訳なき国境団だと冗談で言ったりもしているんですけども、会議も自分が賛同できるようなものを

選んでやるわけです。同じような考え方の。ですから、例えば核兵器の話をしました、平和運動とか、環境保護とか、自分と考えの合うような仕事を請け負うことが多いので、話している人が乗り移ってということはあります。ではフラストレーションはたまらないかという、たまることもありますね、ほかに言いようあるだろうとか、ここでそういう話しするかとか、そういうのはあるんです。しかし通訳者として、そういうのはやはり抑えなくちゃいけないですよ。その人に成り代わってしゃべるわけですからね。

そういう場でも、政治的正当性というのがあって、この用語はよくない、使わないでほしいって、そういうのはしょっちゅうです。いっぱいありますよね、人権とか、障害者に関するようなこととか、精神医療とか。障害者の権利を求める会議、最近はあまりやりませんけど、やっていた時は、障害者という言葉も使ってくれるなって言われましたね。障害のある人とか、障害のない人って、同じような形にしたいわけですよ。健常者っていう言葉は使わないように。そうすると障害がないのが普通、それが正しいというふうになってしまうのでとか、障害を抱えた、これも何か障害が重荷になっているからよくないとか、ハンディキャップという言葉も使わないこと、別にハンディとはとらえていない、とか、一連の政治的正当性の言葉があります。その辺の基準や方針が、団体によって違ったりするときもあります。

ニュースで言うと、NHKの衛星放送だとBBCなんかのときに、日本人のキャスターがまず出てきて、BBCはこのように伝えております、次のように言っています、とか言うんですけども、そこで「日本が軍隊をイラクに送ることになりました」って、原文の言葉通り訳す。向こうはJapanese militaryとか、Japan is sending its troopsとかいうわけです。そうするとNHKでは、この国に軍隊はないことになっているので、自衛隊と訳してくれとなるわけです。でも、自衛隊なんて言葉は外国人知りもしない、外国ではこのようにとらえられているということを見聴者に分かってもらうためにも、原文通りの言葉使いで訳すべきと私など言うんですけど、取り合ってもらえません。「次のように伝えてます」と言っているんだし、とも思うんですが。

ですから、BBCは「兵を送った」「派兵した」というような言い方をするんだけど、あれは自衛官であって、あれは派遣であって派兵じゃないとか、そういう縛り、言葉に関してはいろんな縛りが、いろんな場面でありますね。政治的な事情、配慮だったり、差別用語、政治的正当性の問題だったり、もろもろのいろんな都合です。

**司会：**

じゃあ、どうぞ、最後にどうぞ。

**C氏：**

＊

\*

**中嶋：**

そうですね。それは世論調査ではっきり表れているようですね。若い世代、特に今ミレニアルとか言われている人たちですよ。その人たちの意見は、逆に原爆投下は正当化できないっていうのが増えてきているという、いろいろ違いもあるんですね。パレスチナ問題なんかにしても、昔はイスラエルべったりだったアメリカは、最近ではイスラエルのやっていることは間違っているというユダヤ系のアメリカ人、若い世代が増えてきているとか、変わってきている面もあると思いますね。

**C氏：**

\*

**中嶋：**

今日、最後の方で言いたかったこととちょっとつながればと思いますが、空爆の話で、例えば東京大空襲、名古屋も大空襲もあったわけですよ。その時に、戦争となればお互い人種差別、敵は自分たちより下等な人間だと、人間以下だとなってしまうということですよ。日本は重慶で絨毯爆撃というのを長い間、何年も続けてと、そういう話に最後つなげたかったんですけども、東京大空襲の時に、B29から爆弾落としてアメリカ兵が「ジャップどもをやっつけた、わー」なんて喜んだ。

でもハッとして、待てよと、下にいるのも同じ人間じゃないか。家族、ちょうどオバマさんが広島で言ったような、「家族が食卓を囲んで」云々です。それをその時、そこまで思い至る人がいたんですね。彼は、アメリカ本国に戻って、戦後、平和運動に転じるんですね。B29から爆弾を落としてワーストとやっていた仲間から離れて。だから、原爆投下は正しかったというような世論、当時はもっとそれが強かった中で、家族も離れて行って、変人扱いされて、それでも平和運動を続けていたって人がその当時からいたわけです。

だから、真実というのかな、そういうところを知った人同士でつながったり、見つけた

りすることが大事だと思います。それから、戦争が終わると、戦争の時の特殊な感情、人種差別のようなものはなくなって、もっと冷静に考えられるはずですよ。そういうところから、いちばん最後のほうのスライドでお見せしたかったのは、政府間で起きていることと市民の間のことは別だよという、ニュースで出てくるのは政府の間のことばかりですけど、最後は中国の一般の人のことをもっと見せたかったんですね。民間の間では中国人と友達になれる。あるいは私もアメリカの悪いこといっぱい言いますが、別にアメリカ人が嫌いなわけじゃなく、アメリカ政府が嫌いなだけで、アメリカ人の中には優れた人、立派な人、いっぱいいる、友達もいますし、そういう人たちとの関係を強めていけば、ということなんです。核兵器もなくなりません、戦争もなくなるというのは、アメリカの政治だったり政府なんですね。

今すぐそういうものを取っ払うと、確かにアジアは怖いところがあって、指導者も非常に怖いような人たちがいるし、アメリカでもへたすると怖い人が出てくるかもしれない。日本はその間、平和憲法、9条だけで戦争防げるかというとなげないような気もします。平和思想というのを国民の間でもっと強める必要が日本はあるんじゃないかなと思います。

#### 司会：

どうも、まだまだたくさん質問とか、意見とかあると思うんですけど、時間がもう来てしまいました。これで今日の国際教養学部講演会を終わりにしたいと思います。素晴らしい講演をしていただいた中嶋さん、ありがとうございました。

それでは、これで国際教養学部講演会を終わります。皆さん、どうもありがとうございました。